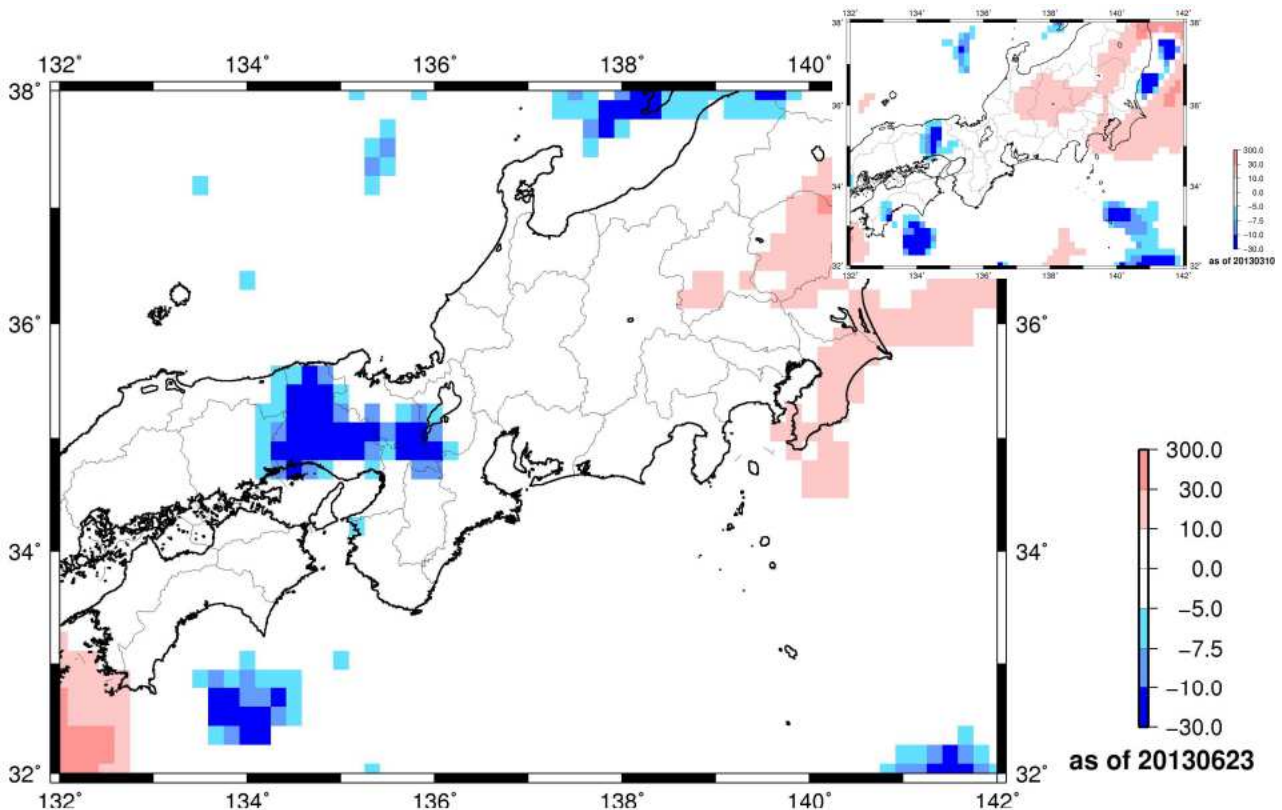


東海・近畿地方の状況など

下の図は6月23日の時点での、東海地方ならびに近畿地方の地下天気図です。海域の地震データも使用しています。右上の小さな図は3月10日時点の地下天気図で、それほどパターンが変化していない事がわかります。中部地方で赤色の地域が減少しているのは、相対的に3.11以降活発化していた地震活動が、過去10年の平均に戻ってきたことを示しています。

陸域で一番気になりますのは、兵庫県を中心とした青色の部分（＝地震活動静穏化地域）が拡大している事です。ただ、面積はまだ小さく、過去の事例と比較しますと被害を伴うような大地震の前兆現象とは考えにくい状況です。なお東海地方には異常は出ておりません。



紀伊半島沖で地震活動が活発化しているという報道がありました

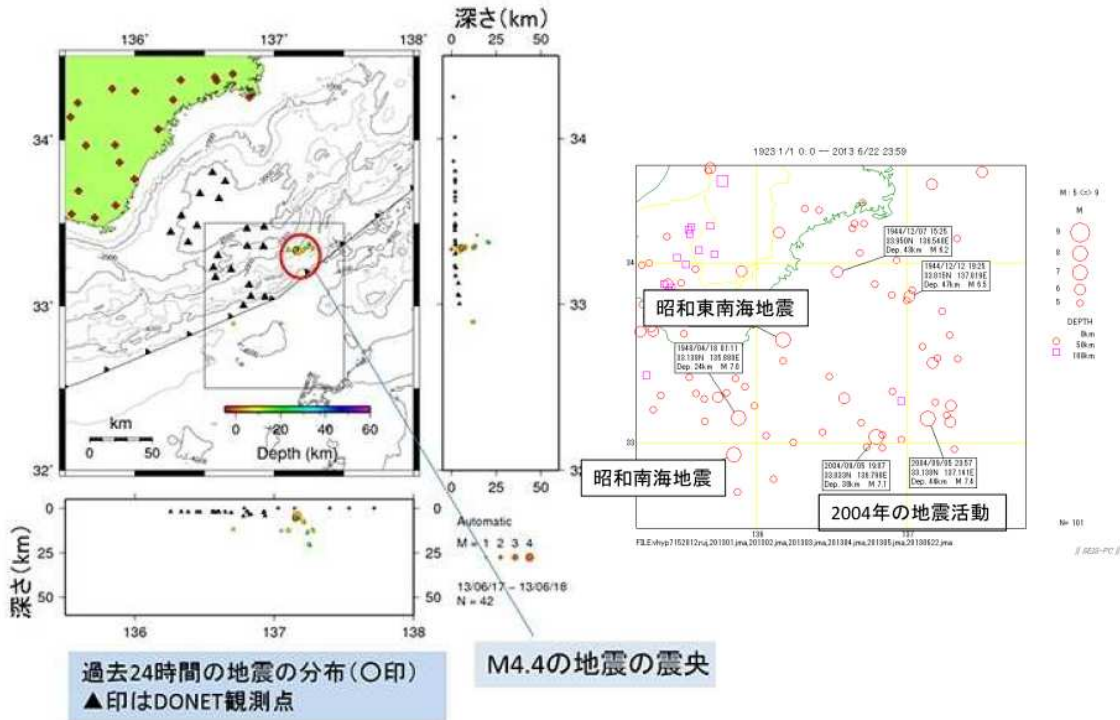
6月19日、海洋研究開発機構（JAMSTEC）から以下のプレスリリースがありました。

熊野灘で地震が群発

2013年6月18日午前9時20分頃、熊野灘でマグニチュード（M）4.4の地震が起きました。地震の深さは約4km（DONETデータ自動処理による）と推定されます。DONET観測開始以来、今回の地震の周辺ではM2程度の小さな地震は数多く起きていましたが、M4より大きな地震は初めて観測されました。この地震に伴い、地震の約2時間前から周辺で多くの地震が発生しており、地震後も多くの余震がDONETにより観測されています。

DONETというのは、紀伊半島・熊野灘沖に設置された海底ケーブル観測システムで、地震計や津波計が接続されています。熊野灘沖での地震検知能力を飛躍的に向上させました。今後類似の観測システムが南海トラフ沿いに展開される予定です。

2013年6月18日熊野灘の地震



左側は海洋研究機構の記者発表 <http://www.jamstec.go.jp/donet/j/topics/201306kumanonada/>の図です。

熊野灘沖での過去の地震活動を気象庁のデータが存在する1923年から調べてみますと以下のようにになります。昭和19年、21年の東南海、南海地震の余震を以外はこの地域では50年ほど、ほとんど地震がありませんでした。そして2004年にまとまった地震活動が発生し、我々は新たな段階(次の南海トラフ地震の中長期的な準備段階)に入ったと考えています。このような活動の消長をきちんと監視していく事が重要と考えています。

